

## 春日大工と近世の興福寺

—新出の興福寺中金堂図面から—

はじめに 享保2年(1717)正月4日、興福寺講堂から出た火は中心伽藍へと燃え移り、金堂・講堂・南大門・中門・回廊・南円堂などの主要堂宇を焼いた。寺はただちに伽藍の復興計画を立て、寛政9年(1797)に南円堂を、文政2年(1819)に規模を縮小した中金堂を再建したものの、他の建物は復興されずに今日に至っている(奈良県教委『重要文化財興福寺南円堂修理工事報告書』1996)。

このたび、この享保炎上に関連する興福寺中金堂の詳細な図面が、木興修三家(奈良市)に所蔵されていることを知った。この図面に表される中金堂は、奈良時代以来の規模である五間四面裳階付きの平面を示し、文政再建の現中金堂以前の形態を想像するに足る、豊かな情報を持っている。ここに紹介するとともに、近世中後期の興福寺復興について考察を加えてみたい。

**木興家伝来の図面** 木興家所蔵の図面は袋入りで19枚、いずれも毛筆で描かれている。袋書には「応永年間造営興福寺金堂貳拾分之図 藤原大和守家次製図」とあり、貞和3年(1347)頃に再建(応永年間造営とあるのは、応永6年(1399)の再建供養のこと)、享保に焼失した中金堂を、木興家の先祖にあたる藤原朝臣大和守家次が図化したものとされる。家次は元禄6年(1693)に死去しているので、それ以前の作成とみられるが、この袋書きは昭和戦前期の郷土史家藤田祥光が、家伝に基づいて記したもので、図面自体には記名、記年はない。

図面は次の3種に分類できる。A:1/20の詳細な中金堂図面(No.1~11)、B:「興福寺金堂云々」の内題がある1/20、1/50建地割図(No.12・13)、C:その他の建物の図面(No.14~19)である。以下、B、Aの順でみていきたい。

まず、Bに分類した2枚は、すでに知られている東京国立博物館所蔵「興福寺建築諸図」(以下「東博図」と略す)と関連がある(濱島正士『興福寺建築諸図』(東京国立博物館蔵)について)『MUSEUM』461 1989を参照)。中西治兵衛元雅、中西廣保らが作成し、中西家に伝来したこの東博図には、金堂の1/50、1/20梁間建地割図が含まれている。1/50図は延宝3年(1675)の年記があることから享保焼失前の実測図とみられ、1/20図は1/50図とは

(注) 括弧内は原本無題による仮題

ほぼ同一ながら改良した点も認められることから、焼失後まもない時期に、中西治兵衛に再建見積が依頼された際に作成されたものと考えられている。木興家図BのNo.12は東博1/50建地割図の写し、そしてNo.13は東博1/20建地割図と細部、構造形式が一致することから、同一計画の桁断面を記したものと見え、東博図と一連の計画に基づいた図面ということになろう。

次に、木興家図Aの11枚についてみると、東博図および木興家図Bに比べ、表現および寸法記入が圧倒的に丁寧かつ詳細である。図面としての技法的な特徴を東博図と比較すると、次の6点があげられる。①記年、記名がない。②寸法、木割の書き込みがある。③建具が詳細に書き込まれている。④材の本数、四半敷の石数などの書き込みがある。⑤へら引きを墨線の下書きとして丁寧に入れている。⑥朱書きの寸法引出線が入っている。

以上6点からは、1)見積および施工を意識したもので、2)施主、中井役所への提出図ではなく、3)長期保存を考えた慎重な浄書、といった印象を受ける。これらの特徴には近世前期に遡る要素は見受けられず、また紙質、虫食い、書体からみても、近世中後期の図面とみるのが妥当と思われる。

木興家図Aに描かれた中金堂は、外観については東博図とほぼ一致するが、小屋内部の構造が決定的に異なり、中金堂建設が十分可能な施工図のレベルに達している(グラビア)。東博図と比較すると、尾垂木、隅木、桔木各尻のおさまりなど、軒の垂下への対応策に技術の洗練度をうかがうことができる。またNo.4とNo.5には、

図 木興家所蔵図面No.9 「金堂増上之図」

本屋四手先組物内を斜めに貫通する鉄棒が、へら引きまたは朱書きで書き込まれている。これは寛政再建の南円堂にも見られる組物の補強技法で、木興家図Aが南円堂と同じ技術系統に基づく計画であることを示しており、近世中後期という作図時期の想定を裏付ける。以上の技術的創意からすると、木興家図Aは、同Bの1/20図および東博1/20図よりも後の段階を示すものと言えよう。

**春日大工と近世興福寺の造営** 木興家および東博図の作者中西家は、ともに春日社、興福寺の造営を担当する春日座に所属する大工であった。両家に興福寺の図面が共に伝わっていたことから、各家だけでなく春日座全体として建築技術を共有し、継承していこうとする意志が具体的に見てとれる。延宝期に興福寺の実測が行われたのも、春日座全体の戦略として位置づけられるのかもしれない。もともと中世に興福寺座という名で春日社、興福寺の造営を独占していたこの座が、近世に中井家の支配下に置かれるようになると、春日社の式年造替を担当する集団として存続はするものの、その他の業務形態は

変質を被らざるを得なくなったと思われる。そこで、春日社だけでなく、興福寺の建築についても改めて実測を行い、その技術を継承していくことを、座存続の拠り所にしようとしたのではないか。

続いて起こった享保の炎上は、この継承すべき中心伽藍を烏有に帰したが、座が蓄積してきた技術を実地に活かす機ともなった。木興家図Aの1/20図面は、中西家による見積以来、寺側の再建計画が幕府によって再三にわたりに却下されてきたことに対する最後の抵抗として、作成された案だったのである。東博図が中世再建の中金堂をそのまま継承しているのに対し、木興家図Aは、近世の技術を総動員して、古代の規模をもつ中金堂を甦らせようとするものであった。換言するならば、近世における古代建築の復元案ともいえるべき、春日大工の夢の結晶である。

だが、この計画は実現しなかった。興福寺と春日大工の壮大な夢の果てに、かろうじて縮小された中金堂が建てられた。しかし、赤堂と呼ばれ親しまれたその堂も、今、姿を消しつつある。 (清水重敦／平城宮跡発掘調査部)